

「戦争を語る ～ 遺骨収集発掘の体験から」

渡辺 盛夫さん(昭和 19 年生まれ)

私が遺骨収集に興味をもったのが、現職中、しばしば硫黄島を訪れたことに始まる。某建設会社の所長から「まだ、こんなご遺体が出るのですよ」と見せられたのが、戦闘帽を被った日本兵の白骨遺体だった。戦闘が激しかった硫黄島で完全遺体は珍しい。これを契機に遺骨収集に参加することとなった。

最初の訪問地はロシア北東のシベリアであった。多くの日本兵が終戦直後、捕虜となりシベリア各地の収容所に収容され、強制労働に従事し、極寒の地で命を落とし、故郷の地を踏むことなく、シベリアの地に埋葬された。その数 5 万 6 千人。

私が遺骨収集に参加したのが 2018 年の夏だった。シベリアの大地は広い、成田からウラジオストック、ハバロフスク経由でシベリア鉄道に乗り換え、丸一日経て、コムソモリスク駅。バスに乗り換え目的地のゴーリン村へ。

毎朝 8 時に食堂に集合し、ロシア風の食事を済ませ、昼食にピロシキ（ロシア風のパン）をもって、車で近くの現場に向った。日本人スタッフ 10 名、現地作業員、ロシア人スタッフ 10 名で発掘調査が開始された。当時のロシア軍の埋没地図を頼りに発掘が開始された。シャベルカーで約 1m ほど掘り下げると、ご遺体の一部が露出してきた。ここからは熊手、刷毛を使って掘り出し、丁寧に骨に付着した土を落とした後、頭蓋骨、大腿骨、すべての人骨の骨が I ケ所に集められた。ご遺体は等間隔に埋葬されていた。一日、5 遺体以上回収し、1 週間で 43 体を回収、最終日に焼骨し、遺骨として日本国に持ち帰り、DNA 鑑定が行われる。

全遺体は衣類を身に着けておらず、死後、衣類を剥ぎ取られ、埋葬された。現場の最高気温は 31.5 度で、真夏でも過ごし易い。冬場はマイナス 50～60 度にもなる、そして酷寒での強制労働、食事は黒パン少々、大概のご遺体は虫歯に蝕まれていた。シベリアの大地は、鳥、動物、昆虫などの生物の存在は一切見られない。作業中は大量の蚊、殺人ダニに噛まれる恐れから、常にネット帽子に防虫スプレーは手放せなかった。以前持ち帰ったご遺骨に外国籍のご遺体が混じっていて社会問題となったが、今回は優秀な日本人鑑定士が同行しているので問題ないだろうと確信している。

2023 年夏、日本から 1200km 離れた南の孤島サイパンは、太平洋戦争の終戦間近、日

本の戦略的要衝であった。米軍は大量兵器、人員をもって、南海の孤島を攻め立てた。この島には島民（日本人 2 万）日本兵 3 万が駐留していたが、戦力で勝る米軍に対しては、日本兵は小高い石灰岩の洞窟に立てこもり、応戦するしか道はなく、勝ち目がないと判断した大隊は、夜間にバンザイ突撃で多くの将兵が犠牲になった。海岸には、大量の日本兵死体が散乱していたと言われる。それでも米兵は立て籠もる日本兵には火炎放射器を、また手榴弾を洞窟に投げ込んだ。私共は毎日、洞窟内搜索したが、砲撃などで岩盤が崩れており、大岩、小石を取り除くのに時間を要した。骨は石灰岩に同化し見分けが付きにくい。大きな大腿骨、上腕骨などは目視で判断できるが、小骨は振るいに掛け、石灰岩の小石と区別が付きにくく、専門家に聞いたものだ。日本兵携行品（水筒、小銃、弾薬、認識票）も発見された。ある日、全員で島内巡視した。米軍に圧倒された日本兵が、島の奥へと逃亡し、行き場を失った兵士や日本人家族はバンザイクリフと言われる断崖から次々と身を投げた。民間人のなかには女子、子供が多くいた。そこには石碑が建立されていた。

米軍はサイパンを占領すると、テニアン島も制圧し、東京大空襲に向かう B29 爆撃機の発着地となった。サイパン島への直行便はなく、グアム経由の不便さ、とレジャー施設が乏しいので観光客は少ない。もっと過去の戦争遺跡を見学に観光客が来てくれればと願っています。

終わりに

シベリアでは終戦を迎え、帰国を待ち望んでいた日本兵が捕虜として、満州国からシベリアへ送られ、強制労働（木材の伐採、鉄道の敷設、等）を極寒の地で働かせられ、5 万以上の兵士が命を落とした。ご遺体が完全無欠の状態で発掘されたことは幸いであった。

一方、サイパンでは、米兵との激しい戦闘で、砲弾、火炎放射器による火炎で、洞窟全体が黒変し、ご遺体と一見して分かるものはなく、骨片を集めて、DNA 鑑定する場合が大部分であった。サイパンは東京の暑さほどではないが、蒸し暑さと洞窟内の作業のため、高齢の私にとっては堪えた。

戦後 80 年を経て、戦争の記憶が薄れる中、私自身戦争の体験はしていないが、戦地に

赴き、過去の痕跡に触れられたことは幸運であった。

令和7年4月11日 寄稿